

# 大伴家持「挽歌一首」のうつそみ・うつせみ

——『萬葉集』卷第十九、四二一四番——

小原 茉莉

## 序

天平勝宝二年（七五〇）、大伴宿祢家持は、賀の藤原二郎の母の訃報を受け、『萬葉集』卷第十九、四二一四番と反歌二首を詠んだ。天皇の命に従って越中に赴任したために賀と疎遠になった寂しさや、使者から賀の母の訃報を受けて哀傷する心中を表現している。家持はこの歌で、「うつそみ」と「うつせみ」の二語を一度ずつ使用した。

挽歌一首 短歌を并せたり  
天地の 初めの時ゆ 宇都會美の 八十伴の男は 大君  
にまつろふものと 定まれる 官にしあれば 大君の

命 みこと 恐 おそ いみ み 鄙 ひな 離 ざか る 国 くに を治 をさ むと あしひきの 山川 やまかは 隔 へ り  
風雲 かぜぐも に 言 こと は通 かよ へど 直 ただ に逢 あ はず 日 か の重 かさ なれば 思 おも ひ  
恋 こ ひ 息 いき づき居 を るに 玉 たま 梓 す の 道 みち 来 く る人の 伝 つ て言 こと に  
我 われ に語 かた らく はしきよし 君 きみ はこのころ うらさびて  
嘆 なげ かひいます 世 よ 中の 憂 うれ けく辛 つら けく 咲 さ く花 はな も 時  
にうつろふ 宇 う 都 つ 勢 せ 美 み も 常 とこ なくありけり たらちねの  
御 み 母 はは の命 みこと なにしかも 時 とき しはあらむを ま ま せ鏡 かがみ 見 み れ  
ども飽 あ かず 玉 たま の緒 を の 惜 おし しみ盛 さか りに 立 た っ霧 きり の 失 う せ  
ゆくごとく 置 お く露 つゆ の 消 き えゆくがごと 玉 たま 藻 も なす な  
びき臥 ふ い伏 ふ し 行 い く水 みづ の 留 とど めもえぬと 狂 くる 言 こと か 人 ひと の  
言 こと ひつる 逆 さか 言 こと か 人 ひと の告 つ げつる 梓 す 弓 ゆみ 爪 つめ 引 ひ く夜 よ 音 ね の  
遠 とほ 音 ね にも 聞 き けは悲 かな しみ にはたづみ 流 な るる涙 なみだ 留 とど め  
かねつも （卷第十九、四二一四）

## 反歌二首

遠音にも君が嘆くと聞きつれば音のみし泣かゆ相思ふ我  
 は (同、四二二五)

世の中の常なきことは知るらむを心尽くすなますらをに  
 し (同、四二二六)

右は、お伴宿祢家持の、聿の南右大臣家の藤原二郎  
 の慈母を喪ひし患へを弔ひしものなり。五月二十七日

従来 of 注釈書では、「うつそみ」「うつせみ」の二語の持つ  
 意味・ニュアンスを特に区別していない。大別して、「うつ  
 そみ」は「うつせみ」と同じとするもの(『新編 日本古典文  
 学全集』など)と、「うつそみ」が「うつせみ」の古形だと  
 するもの(『新潮日本古典集成』など)がある。

しかし、家持が「うつそみ」と「うつせみ」という異なる  
 語形を、無意識に同語として使用していたとは考えにくい。  
 両語に使い分けの意図があると指摘しているのは、私が調べ  
 た範囲では、廣瀬誠氏・鉄野昌弘氏・新沢典子氏・原田直保  
 美氏のみである。廣瀬氏と原田氏は、『萬葉集』もしくは家  
 持の歌すべてを通して「うつそみ」と「うつせみ」にそれぞ  
 れ一貫した固有の意味やイメージがあったとし、家持はその

流れに沿って両語を使い分けたとしている。鉄野昌弘氏は、  
 使い分けが「無常の意の有無」によるとしている。新沢氏は、  
 柿本人麻呂が両語を使い分けており、家持もそれに倣ったと  
 述べている。

本稿では、「うつそみ」「うつせみ」の用例を具体的に分析  
 し、諸氏と異なる見解として、巻第十九、四二二四番の「う  
 つそみ」は家持の官人意識に、「うつせみ」は無常観に基づ  
 いて独自に使い分けられていることを論じる。

## 一、「うつせみ」と「うつそみ」

一八五頁の表「『萬葉集』の「うつせみ」と「うつそみ」  
 は、『萬葉集』における「うつせみ」と「うつそみ」の二語  
 の使用例を年代順にまとめたものである。

「うつせみ」は『萬葉集』に三九首・四〇例、「うつそみ」  
 は五首・六例見られる。「うつせみ」が『萬葉集』全体を通  
 してほぼ偏りなく使われ、特に巻第二・巻第十九に頻出する  
 のに対し、「うつそみ」は朱鳥元年(六八六)から文武四年  
 (七〇〇)の巻第二収録の歌に六例中五例が集中している。  
 残りの一例が、先に挙げた天平勝宝二年(七五〇)の家持の

卷第十九、四二—四番である。なお、六例の中には、人麻呂の卷第二、二一〇番に異伝（二云）として記された「うつそみ」や、この歌の異伝である卷第二、二二三番の「うつそみ」二例を含む。また、「うつせみ」は挽歌と相聞を中心に部立の記載がない歌や雑歌にも見られるが、「うつそみ」は挽歌でのみ用いられているという特徴がある。

「うつせみ」「うつそみ」の語源は大野晋氏が提唱したように『古事記』の「宇都志意美（現し臣）」という語だとする説が支持されているが、「宇都志意美」の解釈が分かれており、「うつせみ」の原義にも諸説ある。

「うつせみ」の最初の使用例は斉明七年（六六一）に中大兄皇子が詠んだ大和三山歌（卷第一、十三番）で、この歌では「うつせみ」と「古」とを対比している。

香具山は 畝傍を惜しと 耳梨と 相争ひき 神代より  
かくにあるらし 古も 然にあれこそ 虚蟬も 妻を  
争ふらしき  
(卷第一、十三)

天智十年（六七二）に姓氏不明の婦人が詠んだ卷第二、一五〇番では、神ではなく人間である自らを「うつせみ」と称

している。天武四年（六七五）の卷第一、二四番は、流罪に処せられた麻統王が「うつせみの命」を惜しむ内容である。

「うつせみの」を「命」に掛かる枕詞とする注釈書が多いが、「人間の命」の意とも読み取れる。これら初期の使用例では、現実に肉体を持って生きている人間を古の時代や神などと対比して「うつせみ」と表している。また、これらの歌では「うつせみ」が独立した名詞として用いられている。

「うつそみ」の最初の使用例は朱鳥元年（六八六）に大来皇女が弟の大津皇子を哀傷して詠んだ挽歌である卷第二、一六五番で、ここでは弟を亡くして遺された自分自身を「うつそみの人なる我」と形容している。

宇都會見の人なる我や明日よりは二上山を弟と我が見む  
(卷第二、一六五)

柿本朝臣人麻呂には「うつせみ」と「うつそみ」両方の使用例があり、二つの語形が存在することを把握していたと考えられる。持統六年（六九二）以降の作とされる卷第二、二一〇番では、初めは亡くなった相手の生前の姿を「臣」という字を用いて「うつそみ」の語形で表したが、最終的に「う

つせみ」に訂正したようである。<sup>(8)</sup>

打蟬うつせみと 思ひし時に 一に云ふ、「宇都曾臣と 思ひし」 取り持  
ちて 我が二人見し 走り出の 堤つみに立てる 榎えぎの木の  
こちごちの枝の 春の葉の しげきがごとく 思へりし  
妹にはあれど 頼めりし 児らにはあれど 世の中を  
背そむきしえねば…… 岩根いはねさくみて なづみ来し 良よけ  
くもそなき 打蟬うつせみと 思ひし妹が 玉かざる ほのかに  
だにも 見えなく思へば (巻第二、二二〇)

人麻呂も家持と同様に「うつせみ」「うつそみ」を別語として認識していたが、内容に応じて使い分けを行ったのではなく、一つの事象に対する表現の正確性を求めたと言うべきだろう。この点で、後に別個の事象にそれぞれ「うつそみ」と「うつせみ」を充てた家持とは大きく異なる。

人麻呂による持統十年(六九六)の巻第二、一九九番に「行く鳥の」の異伝として「うつせみと」が記されており、命を散らしても構わないという軍士の覚悟を表したと思われる。ただし、「うつせみ」はあくまで最終稿でないとされる異伝でのみ用いられており、人麻呂の意図をどの程度反映し

ているかは不明瞭である。文武四年(七〇〇)に巻第二、一九六番で明日香皇女の挽歌を詠んだ際には、皇女の生前の様子を「うつそみと 思ひし時に」と回想した。

また、これら人麻呂の用例はすべて挽歌で、巻第二、二二〇番と異伝の巻第二、二二三番は仏教的無常観を前提とした歌である。人麻呂の影響を受けて、後に家持が「うつせみ」の語そのものを無常観と結びつけたり、中古以降の歌人たちが蟬・蟬の抜け殻を「うつせみ」で表したりしたと考えられる。

家持は、「うつそみ」と「うつせみ」の二語に差異があることや、これらが「臣」としての自覚とも無常観とも結びつきうる語であることを、人麻呂の歌から着想したのでろう。

人麻呂の歌以降、「うつせみ」は三〇年間ほど、「うつそみ」は五〇年間ほど使用例が見られなくなる。ただし「うつせみ」には詠まれた年が明らかでない使用例が十四首あるため、この期間にも「うつせみ」は使用されていた可能性がある。

その後、七〇〇年代以降に歌を詠んだとされる笠女郎や大伴坂上郎女らによって、相聞歌で恋愛関係にある相手以外の他者を「うつせみの人」と呼ぶ例(巻第四、六一九番や巻第

四、七二九番など）が登場する。「世間の人」と訳される場合が多いが、仏教的無常観を込めた「世間」のニュアンスはないため、単に「人々」とするのがより適しているだろう。

神亀五年（七二八）の巻第九、一七八五番から、笠金村が「うつせみ」を「うつせみの世の人なれば」の形で三度使用した。これらは「うつせみの」を「世」に掛かる枕詞として使用した最初の例でもある。

……死にも生きも 君がまにまと 思ひつつ ありし  
間に 虚蟬の 世の人なれば 大君の 命恐み 天ざか  
る 夷治めにと……  
(巻第九、一七八五)

これらは「うつせみの世の人」であるからこそ「大君の命恐み」、官人として任務に当たるという意識を表出した使用例である。「うつせみ」と官人意識の結びつきは金村によつて生まれており、家持の巻第十九、四二—四番の「うつせみの八十伴の男」に影響を与えたと考えられる。大伴宿禰三中は、天平元年（七二九）に文部竜麻呂の官人意識を称賛した巻第三、四四三番を詠んだが、「うつせみの」という枕詞は「惜しきこの世」に掛かっており、初期の生きている人

間を示す「うつせみ」の使用例に近い文脈での用法と言える。この頃になると、「うつせみ」は独立した名詞ではなく、枕詞として用いられるようになる。内容面でもかつてのように、時には古と、時には神と対比されながら人間の肉体や命を意識させていた頃とは変質した例が増える。

最も多く「うつせみ」を用いて歌を詠んだのが、天平十一年（七三九）以降の家持である。家持は「うつせみの」を枕詞として使う当時の流れを汲んだ歌を作りつつも、天平勝宝二年（七五〇）以降は独立した名詞として用いる語法も復活させた。

そして、「うつせみ」を用いつつ無常観を表現した人麻呂の使用例を發展させ、明確に「うつせみ」と無常観を結びつけた。その最初の例が天平十一年（七三九）の巻第三、四六五番である。

虚蟬の世は常なしと知るものを秋風寒み惚びつるかも  
(巻第三、四六五)

いっぽう、家持が「うつせみ」を用いた歌で官人意識を最初に表出したのは天平十九年（七四七）の巻第十七、三九六二番である。

大君おほきみの 任まげのまにまに ますらをの 心こころ振り起おこし  
 あしひきの 山やま坂さか越こえて 天あま離わかる 鄙ひなに下くだり来き  
 も いまだ休やすめず 年とし月つきも いくらもあらぬに 宇う都つ世せ  
 美みの 世よの人ひとなれば うちなびき 床とこに臥こい伏ふし……

(卷第十七、三九六二)

家持は神代から軍事・宮門守護を職能としてきた大伴氏の家長として、自らの家柄と職に強い責任と誇りを持っていた。

この歌では、天皇の命に応じて平城京を離れ国守として越中へ赴任してきたものの、忙しい日々の中で病床に伏してしまつたことを悲傷している。

天平勝宝二年(七五〇)の卷第十九、四二一四番では「うつそみ」と「うつせみ」の二語を一首の中で用いている。

「うつそみ」は柿本人麻呂以来の五〇年ぶりの用例であり、家持の官人意識と結びついた用法である。「うつせみ」には卷第三、四六五番のような仏教的無常観の実感が込められている。

以上のように、『萬葉集』の用例から、「うつせみ」「うつそみ」の二語が多様な用法で用いられてきたことや、家持が先達の歌を学び、かつ独自の語法をも追求した歌人だったこと

とが窺うかがえる。

## 二、家持の葛藤と作歌意識

歌人・家持は、官人意識と無常観を併せ持っていた<sup>10</sup>。家持がこの二つの相反する意識の間で葛藤していたことは、卷第二十、四四六五・四四六七番で官人意識を表現した同日に、無常観に基づいた卷第二十、四四六八・四四七〇番を詠んでいる点などに顕著に表れており、「同じ人物が一日に詠んだ歌としては振幅が甚だ大きい(岩波文庫『萬葉集(五)』)」と指摘されている。これら二つの意識の間での葛藤がよく表れたのが卷第十九、四二一四番やその反歌であり、特に「うつそみ」と「うつせみ」の二語だったと言える。

また、家持は、過去の歌に学んで歌語を獲得したり、独自の語法を編み出したりしてより良い表現を模索した。このことは卷第十九、四二一四番で用いられた「うつそみ」「うつせみ」以外の語句や、それに類する表現にも表れている。

卷第十九、四二一四番のような他者から人の死を伝えられて弔意を表す形式の挽歌は、人麻呂・金村らを筆頭に先例が多い。人麻呂が家持に与えた影響についてはすでに多数指摘

があるが、家持は金村の歌からも影響を受けていたと考えられる。たとえば、「玉梓たまはらの道みち来る人の」、「我われに語かたらく」という句は金村と家持を含むごく少数人に使用例が限られており、どちらも金村の卷第二、二三〇番と家持の卷第十九、四二—四番に共通している。「うつせみの世の人なれば」という句や「八十伴の男」という語も、使用例のほとんどが金村と家持によるものである。

小野寛氏は、家持が「大君のまけのまにまに」を「大君の命かしこみ」という定型表現の代わりに多く用いたことを、天皇に積極的に従属するますらを意識の強さと、自らの意識を正しく表現しようとする態度の表れだと論じた<sup>11)</sup>。卷第十九、四二—四番は、官人である自らのことを述べつつも消極的な「命みこと恐かしこみ」という語を使っている数少ない例外である。小野氏はこのことを「意識の緊張がゆるんだ」と評しているが、官人意識だけでなく無常観をも表現した歌だからこそこの句を用いたとも捉えられる。さらに、金村が「うつせみの世の人なれば 大君おほきみの命みこと恐かしこみ」と詠んだことも影響しているのだろう。

他にも、卷第十九、四二—四番の「思おもひ恋こひ」については清水明美氏が、「玉藻たまもなすなびき臥ふい伏ふし」については新沢

典子氏<sup>13)</sup>が、家持独自の表現だと論じている。

## 結

前述したように、『萬葉集』で「うつせみ」や「うつそみ」は、時期・作者ごとにそれぞれ異なる用法・内容で用いられてきており、語法が一貫していたわけではない。家持は、先例を継承しつつ再構成し、独自の用法も考案することで、卷第十九、四二—四番を完成させたものと思われる。

「うつそみ」は、家持が卷第十九、四二—四番を詠んだ約五〇年前を最後に使用例がなかった語形で、家持が人麻呂らの歌に学んで意識的に選択したものと推測される。いっぽう「うつせみ」は、約三〇年間の空白期間はあるものの、詠まれた年の記載がない十四首を含め継続的に使用例があった。

「うつそみ」という語形が官人意識と紐付いた前例はない。家持が、金村の表現「うつせみの世の人なれば 大君おほきみの命みこと恐かしこみ」と人麻呂の用字「宇都曾臣」の「臣」のイメージを、独自に再構成して生み出した表現と言えるだろう。

金村は「うつせみの世の人なれば 大君おほきみの命みこと恐かしこみ」という表現を三度用い、官人として天皇の命を受けて地方に遣わ

される心情を詠った。金村と違い「うつそみ」という語形ではあるが似た文脈での用法であり、宮廷歌人・笠金村から家持への影響が見てとれる。

「宇都會臣」という用字は人麻呂独自のもので、竹尾正子氏が漢籍の成語「曾臣」を念頭に置いた表記だと指摘している<sup>14</sup>。人麻呂が「臣」という用字で直接「臣下」の意を表していたわけではないが、家持が「うつそみ」という語形に官人としての自覚を込める上での参考になった可能性がある<sup>15</sup>。

また、「うつせみ」は人麻呂の使用例の時点で間接的に無常観と結びついていたが、この繋がりをも直接的にしたのは家持である。人麻呂は他者の死に際して世間無常を実感した旨を歌にし、その歌で「うつそみ」「うつせみ」を複数回使用した。家持は「うつせみの借れる身なれば」「うつせみの世は常なしと」などと、無常観と「うつせみ」の結びつきを強固にした。巻第十九、四二一四番において「うつせみ」を含む一連の言葉は、歌の中では都から来た使者の発語という扱いである。とはいえこれは修辞上の問題で、家持が感じていた無常観が表れた言葉だと考えられる。過去の歌から着想を得つつより強い実感を表出する方法として、「うつせみ」を用いて無常観を表すことを選んだのだろう。

『萬葉集』巻第十九、四二一四番「挽歌一首」は、挽歌としては形式的で内容に特段の独自性がないとの評価が多い。しかし「うつそみ」と「うつせみ」の二語には、官人意識と無常観の狭間にある家持の葛藤が表れている。また、古歌の歌語に対する観察眼、人麻呂・金村の影響、新しい表現を生み出そうとする歌人としての姿勢を見出すこともできる。



年号	西暦	巻	歌番号	部立	表記	該当の句(異伝)	次句	作者
斉明七年	661	1	13	雑歌	虚蟬	うつせみも	妻を	中大兄皇子
天智十年	671	2	150	挽歌	空蟬	うつせみし	神に堪へねば	婦人(姓氏未詳)
天武四年	675	1	24	雑歌	空蟬	うつせみの	命を惜しみ	麻統王
朱鳥元年	686	2	165	挽歌	宇都曾見	うつそみの	人なる我や	大来皇女
(持統六年以降)	692以降	2	210①	挽歌	打蟬	うつせみと	思ひし時に	柿本朝臣人麻呂
(持統六年以降)	692以降	2	210①異伝	挽歌	宇都曾臣	うつそみと(うつせみと)	思ひし時に	柿本朝臣人麻呂
(持統六年以降)	692以降	2	210②	挽歌	打蟬	うつせみと	思ひし妹が	柿本朝臣人麻呂
(持統六年以降)	692以降	2	213①(210①異伝)	挽歌	宇都曾臣	うつそみと	思ひし時に	柿本朝臣人麻呂(210異伝)
(持統六年以降)	692以降	2	213②(210②異伝)	挽歌	宇都曾臣	うつそみと	思ひし妹が	柿本朝臣人麻呂(210異伝)
持統十年	696	2	199異伝	挽歌	打蟬	うつせみと(行く鳥の)	争ふはしに	柿本朝臣人麻呂
文武四年	700	2	196	挽歌	宇都曾臣	うつそみと	思ひし時に	柿本朝臣人麻呂
神亀五年	728	9	1785	相聞	虚蟬	うつせみの	世の人なれば	笠朝臣金村(娘子の代作)
天平元年	729	3	443	挽歌	鬱蟬	うつせみの	惜しきこの世を	大伴宿祢三中
天平元年	729	9	1787	相聞	虚蟬	うつせみの	世の人なれば	笠朝臣金村(斑田使の代作)
天平五年	733	8	1453	相聞(春)	虚蟬	うつせみの	世の人なれば	笠朝臣金村
天平十一年	739	3	465	挽歌	虚蟬	うつせみの	世は常なしと	大伴宿祢家持
天平十一年	739	3	466	挽歌	打蟬	うつせみの	借れる身なれば	大伴宿祢家持
天平十二年	740	8	1629	相聞(秋)	打蟬	うつせみの	人なる我や	大伴宿祢家持
天平十六年	744	3	482	挽歌	打背見	うつせみの	世の事なれば	高橋朝臣
天平十九年	747	17	3962		宇都世美	うつせみの	世の人なれば	大伴宿祢家持
天平勝宝元年	749	18	4106		宇都世美	うつせみの	世の理と	大伴宿祢家持
天平勝宝元年	749	18	4125		宇都世美	うつせみの	世の人我も	大伴宿祢家持
天平勝宝二年	750	19	4160		宇都勢美	うつせみも	かくのみならし	大伴宿祢家持
天平勝宝二年	750	19	4162		宇都世美	うつせみの	常なき見れば	大伴宿祢家持
天平勝宝二年	750	19	4185		宇都世美	うつせみは	恋を繁みと	大伴宿祢家持
天平勝宝二年	750	19	4189		宇都勢美	うつせみは	物思ひ繁し	大伴宿祢家持
天平勝宝二年	750	19	4211		宇都勢美	うつせみの	名を争ふと	大伴宿祢家持
天平勝宝二年	750	19	4214①	挽歌(題詞)	宇都曾美	うつそみの	八十伴の男は	大伴宿祢家持
天平勝宝二年	750	19	4214②	挽歌(題詞)	宇都勢美	うつせみも	常なくありけり	大伴宿祢家持
天平勝宝二年	750	19	4220		宇都世美	うつせみの	世の理と	大伴坂上郎女
天平勝宝七年	755	20	4408		宇都世美	うつせみの	世の人なれば	大伴宿祢家持(防人として)
天平勝宝八年	756	20	4468		宇都世美	うつせみは	数なき身なり	大伴宿祢家持
	不明	4	597	相聞	宇都蟬	うつせみの	人目を繁み	笠女郎
	不明	4	619	相聞	空蟬	うつせみの	人か障ふらむ	大伴坂上郎女
	不明	4	729	相聞	鬱蟬	うつせみの	世の人なれば	大伴坂上大嬢
	不明	4	733	相聞	空蟬	うつせみの	世やも二行く	大伴宿祢家持
	不明	10	1857	雑歌(春)	空蟬	うつせみの	世の人我し	不明
	不明	11	2642	寄物陳思	虚蟬	うつせみの	妹が笑まひし	不明
	不明	12	2932	正述心緒	虚蟬	うつせみの	人目を繁み	不明
	不明	12	2960	正述心緒	虚蟬	うつせみの	現し心も	不明
	不明	12	2961	正述心緒	虚蟬	うつせみの	常の言葉と	不明
	不明	12	3107	問答歌	空蟬	うつせみの	人目を繁み	不明
	不明	12	3108	問答歌	空蟬	うつせみの	人目繁くは	不明
	不明	13	3292	相聞	打蟬	うつせみの	命を長く	不明
	不明	13	3332	挽歌	空蟬	うつせみ世人	(結句)	不明
	不明	14	3456	相聞	宇都世美	うつせみの	八十言の上は	不明

表・『萬葉集』の「うつせみ」と「うつそみ」

## 注

- (1) 佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之校注『万葉集(五)』(岩波文庫、岩波書店、二〇一五)。以降の『万葉集』収録歌も岩波文庫『万葉集』から引用する。また、原文の表記は佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之校注『原文万葉集』(岩波文庫、岩波書店、二〇一五)に依る。
- (2) 廣瀬誠『万葉集の「うつせみ」』(「うつせみ」)『秋核』第六卷、富山女子短期大学国文学会、一九八九。
- (3) 鉄野昌弘「人麻呂泣血哀慟歌の異伝と本文」(「宇都曾臣」と「打蟬」)『萬葉』第一四一卷、萬葉学会編輯委員会、一九九二。
- (4) 新沢典子「大伴家持の古歌注釈——人麻呂歌の「一云」と巻十九の表記」(『名古屋大学国語国文学』第九三号、名古屋大学国語国文学会、二〇〇三)。
- (5) 原田直保美「大伴家持の「挽歌一首」考——「宇都曾美」の八十伴の男」としての共感——」(『国語国文研究』第一五九卷、北海道大学国語国文学会、二〇二二)。
- (6) 長らく「うつせみ」の語源は「現し身」とされていた。大野晋氏は「うつせみ」の語義に就いて(『文學』第十五卷第二号、岩波書店、一九四七)で、上代特殊仮名遣いを根拠にこれを否定し、雄略記の「宇都志意美」という語を「うつせみ」「うつそみ」の語源、「うつそみ」を「うつせみ」の古形とした。
- (7) 毛利正守氏は、「宇都志意美」考(『萬葉』第七四卷、萬葉学会編輯委員会、一九七〇)で一度「宇都志意美」語源説を否定した。しかし、「うつしおみ」と「うつせみ・うつそみ」考(『萬葉語文研究』第十卷、和泉書院、二〇一四)で、奥村紀一「うつせみ」の原義(『国語国文』第五二卷第十一、京都大学文学部国語学国文学研究
- 室、一九八三)を下敷き、「宇都志意美」が「うつせみ」の語源であると論を修正した。大野氏のように「臣」が直接人間を示す語だとするのはなく、「臣」を臣下という意味で解釈する点でも奥村氏の論と一致する。ただし、「宇都志意美」を神の臣下である人間とするか現実の臣下とするか、両者で解釈は異なっている。
- (8) 卷第二、二一〇番の「うつそみ」は「うつせみ」の異伝、卷第二、二一三番は卷第二、二二〇番の異伝である。人麻呂の歌の異伝に関して、伝誦されたために生じたとする説と、推敲されたために生じたとする説がある。曾倉岑氏は「うつせみ」と「うつそみ」の二語を含む種々の語句に着目し、「万葉集卷一・二における人麻呂歌の異伝——語句の比較を通して——」(『國語と國文學』第四〇巻第八号、明治書院、一九六三)で、伝承の影響が存在することも考慮に入れるべきだとしつ、異伝の多くが推敲の過程を示すものだと言及した。卷第二、一九六番の「うつそみ」が訂正されていないのは、修正が不可能だったためか意図があつてのことか判然としない。廣瀬氏(注2)は、大来皇女と人麻呂が「うつそみ」を使用した対象が皇女・皇子といった皇室関係者に限られていたことを指摘した。ただし、その差異が生じる理由として音调の差を挙げ、この点には同意しかねる。
- (9) 以上の変遷については、青木生子「万葉集における「うつせ(そ)み」——挽歌から哀傷歌へ」(『国文目白』第六卷、日本女子大学、一九六七)、尾崎富義「万葉「うつせみ」歌考」(『野州國文學』第二二卷、國學院大學栃木短期大學國文學會、一九七八)でも同様に整理されている。萬葉歌から読み取れる家持の官人意識・ますらを意識については、小野寛氏が「家持の皇統讚美の表現——あまのひつぎ——」(『論集上代文學』第二冊、笠間書院、一
- (10)

- 九七一)にて「あまのひつぎ」という表現に着目して論じている。家持の無常観については、山田孝雄氏が「萬葉集に佛教ありや」(『萬葉集考叢』、宝文館、一九五五)で、市村宏氏が「万葉集と仏教」(『万葉集新論』、東洋大学通信教育部、一九六四)で、それぞれ仏教との関係から論じている。特に弟や妻の死、病気などの経験が世間無常の実感を強めたようである。
- (11) 小野寛「大君の任のまにまに―家持の「ますらを」の発想―」(『大伴家持研究』笠間書院、一九八〇)。
- (12) 清水明美「大伴家持の「思恋」―歌語獲得の方法としての漢語の受容―」(『日本文学』第四七卷 第一号、日本文学協会、一九九八)。
- (13) 新沢典子「大伴家持作「挽歌一首」の表現と主題―「玉藻なすなびき臥い伏し」をめぐって―」(『鶴見大学紀要 第一部 日本語・日本文学編』第四七卷、鶴見大学、二〇一〇)。
- (14) 竹尾正子「柿本人麿の表記字面に見られる成語―「宇都曾臣」について―」(『福岡学芸大学久留米分校教育研究所研究紀要』第十四卷、福岡学芸大学久留米分校教育研究所、一九六四)。
- (15) 奥村紀一氏は、人麻呂が「宇都曾臣」と表記した「うつそみ」を後の家持が官人の自覚を表現するのに使ったことについて、「原義のよく分らぬまま『臣』の感じだけを頼りに古形を模倣したのであろう」と述べた。しかし『古事記』の「宇都志意美」を神の臣下たる人間とする奥村氏の解釈には疑問が残り、家持が自覚的にこの語形を選択したものと思われる。卷第十九、四二—四番の「宇都曾美」という用字は家持独自のものである。人麻呂の「宇都曾臣」の「臣」という用字の影響が窺われながらも「美」という表記なのは、甲類ミを「美」と表記すること

が卷第十九に表れた家持の用字の特徴だからだろう。

(おはら・まり 成城大学文学部国文学科四年生)